

シェアハウスのリビング

場所

幸田 るきあ 21歳

佐藤 夏海 25歳

水谷 佐和子 34歳

佐和子「うわ、最悪。もう何でこんな時に…あー、もう最悪」

佐和子、慌しくリビングに登場

佐和子「あんなに飲むんじゃないかった。最悪だ、ほんとこれ。どこだよ、どこに置いたんだよ、私」

夏海、眠そうにリビングに登場

夏海「…おはよう…」

佐和子「おーい、どこ行っちゃったの。お願い出てきて」

夏海「…無視ですか。まあ、いいけど」

夏海、ソファに座る。

夏海「どうしたんですか？」

佐和子「ああ、おはよう。ねえ、どこかで見なかった？」

夏海「何を？」

佐和子「携帯がないの」

夏海「ああ」

佐和子「私、昨日ここで飲んでたよね？」

夏海「…覚えてないんですか」

佐和子「覚えてます」

夏海「じゃあ、どこにあるか分かるでしょ」

佐和子「…最初だけ」

夏海「え」

佐和子「覚えてるのは最初だけ。ちょっと飲みすぎて途中から記憶が…」

夏海「またですか」

佐和子「いいでしょ。別に迷惑かけてるわけじゃないんだから。でももうお酒は飲まない。

決めた、いま決めた」

夏海「…」

佐和子「何で無視するの。それよりどこになかった？」

夏海「何がですか？」

佐和子「携帯。私の携帯。話の流れで分かるでしょ」

夏海「洗面所にありましたよ。タオル置いてるところ」

佐和子「え、そんなところに？早く教えてよ、もう」

佐和子、リビングから出て行く

夏海「…朝から元気だな…」

洗面所のほうから佐和子の声が聞こえる

佐和子「良かった、あった。良かった」

リビングに戻ってくる佐和子

佐和子「あったあった。じゃあね、行ってきます。やばい、会議に遅れる」

佐和子、急いで出て行く

夏海「あの人、何でいつもあんなに元気なんだろう…うー、まだ眠いわ」

夏海、リビングを出て行くとする

るきあ「おはよう」

夏海「ああ、おはよう」

るきあ「さつき、佐和子さん、すごい慌ててなかった？」

夏海「聞こえてた？」

るきあ「もちろん」

夏海「昨日飲みすぎてスマホが行方不明だったんだって」

るきあ「前にも同じようなこと言ってたよね、それで見つかったの？」

夏海「洗面所にあった。遅刻するからってもう出てったよ」

るきあ「そっか。私も今日はもう出かけるからね」

夏海「そうなの？随分早いね」

るきあ「バイトだよ。彼氏と遊ぶからシフト変わってほしいって言われちゃって」

夏海「マジか。すごい理由だな」

るきあ「まあ、いいんじゃない。レッスンは夕方からだし、お金もほしいし。あ、そうだ」

るきあ、急に自撮りを始める

夏海「どうしたの、急に」

るきあ「リクエストがあったの忘れてたの。朝、仕事に行く前のオフな感じが見てみたい
って」

夏海「ああ」

るきあ「ファンサービスは大切なんだよ」

夏海「そうなんだ、頑張るね。私は絶対無理だな」

るきあ「夏海ちゃんは？」

夏海「私はもう少し寝る。仕事は昼からだし」

るきあ「そう。じゃ、行ってきます」

るきあ、リビングを出て行く

夏海「仕事ってもバイトだけどね。いいや、寝よ」

暗転

オープニング

佐和子、レジ袋を提げて入ってくる

佐和子「ただいま。はいはい、お疲れちゃん。今日も一日よく頑張りました」

佐和子、袋の中の酒を出して飲み始める

佐和子「あー、この瞬間に勝るものなし。染みるわー、お酒飲まない人の気が知れない。

朝はどうなるかと思っただけど間に合っつてよかった。それにしても部長のやつ、こ
っちジロジロ見てくんないよ。なに？酒臭かったとでも言いたいわけか。企画はち
やんと出しています。結果もそこそこ出しています。仕事は真面目にしてるんだから、
少し飲むぐらい別にいいじゃん」

夏海が帰ってくる

夏海 「…ただいま」

佐和子 「あ、おかえり」

夏海 「…」

佐和子 「ここ使ってるけど大丈夫？邪魔だったら部屋行くよ？」

夏海 「…大丈夫です」

佐和子 「あ、せっかくだから一緒に飲まない？」

夏海 「いや…」

佐和子 「え、だめ？何で？飲もうよ」

夏海 「今週もうこれで五回目だったと思うんだけど」

佐和子 「そうだっけ？まあ、いいじゃん。細かいことは気にせずに」

夏海 「…着替えてくる」

夏海、リビングを出て行く

佐和子 「着替えたなら絶対来てよー」

佐和子、つまみを食べたりテレビを見たりしている

佐和子 「何か最近、面白いテレビないなあ…こんな時はニュースに限るわ」

佐和子、リビングで自由に過ごす

夏海 「お待たせしました…何やってるんですか？」

佐和子 「あ、いやちよっと悟りでも開けないかと思って」

夏海 「…お邪魔しました（部屋に戻ろうとする）」

佐和子 「待って待って。一緒に飲もうよ」

夏海 「だって悟り…」

佐和子 「あー、いいのいいの。開くのはまた来週にするわ。とりあえず飲もう」

夏海、ソファに座らされる

佐和子 「はい、それでは今日も一日お疲れさまー」

夏海 「お疲れさまー」

佐和子、缶ビールを一気に飲み干す

佐和子「はー、何だろこの飲み物。いくらでも飲める」

夏海「佐和子さんって本当にお酒好きだよな」

佐和子「そう？これくらい普通でしょ」

夏海「普通じゃないよ。今朝、あんなに焦ってたのにその日の晩にまた飲むなんて」

佐和子「ああ、まあとりあえず大丈夫だったからね。大丈夫なのよ、意外とね」

夏海「ポジティブ最強」

佐和子「よく言われる。でもそんなこと全然ないよ」

夏海「それは嘘でしょ」

佐和子「本当だって。人間ですもの」

夏海「そうかなあ」

テレビを見ながら酒を飲む二人

佐和子「あ、この二人結婚すんの？いくつ、二十二歳。若いよ」

夏海「へえ、前から噂あったよね」

佐和子「最近の結婚はどっちかだな。早いか遅いか」

夏海「そうなの？」

佐和子「うちの会社でも若い子の結婚多いんだよ。入ったばっかなのに子ども出来たら辞めますとか」

夏海「そうなんだ」

佐和子「別にいいのよ、おめでたいことなんだから。でもなんか勇気あるなって思っちゃったりする。若さってこういうことかーって」

夏海「私から見てもそういう人は若いなって思うよ」

佐和子「夏海ちゃん、それはダメよ。はい、警告入ります。三十代半ばと二十代半ばを一緒にしてはダメです」

夏海「でも私そんなに若くない…」

佐和子「若い。夏海ちゃん、それもダメです。若い人はその価値に気付いてないのです」

夏海「そうかな…だって、るきあとか」

佐和子「あー、確かにね。あの子は若いわ」

夏海「夢があるってやっぱすごいと思わない？なんかキラキラしてるもん」

佐和子「そうかもね。私の若かった頃には考えもしなかった夢だしさ」

夏海「アイドルか…」

佐和子「考えたこともないなー。まあ最近はそういう子いっぱいいるから逆に大変そうだよ。あの子もバイトとかでほとんど家に居ないし、ここには寝るために帰ってくるようなもんだね」

夏海「…でもちゃんと理由があっついいな…」

佐和子「え」

夏海「なんでもない。夢中になれるものがあっていいなって」

佐和子「それなら夏海ちゃんにもあるじゃん」

夏海「ないよ」

佐和子「何だよ、小説家なのに」

夏海「違う、小説家志望。まだ何にも形になってない」

佐和子「それでも夢を追ってることには変わりはないでしょ」

夏海「そんなの簡単。とりあえず、言っちゃえばいいんだから」

佐和子「そうなのかなあ」

自由に過ごす二人

夏海「そういえば、佐和子さんって結婚願望とかないの？」

佐和子「え」

夏海「あ、変な意味じゃなくて。仕事楽しいんだらうなっていうのが見て分かるか

ら」

佐和子「そうね、確かに仕事は楽しいかもね」

夏海「今、書こうとしている小説の主人公をね、仕事がすぐ出来るキャリアウーマンっぽい人にしようと思ってるの。だから色んな人に話を聞きたくて」

佐和子「なるほど。でも私の話じゃ参考にならないと思うよ」

夏海「そんなことないよ。なるよ、充分になる」

佐和子「そうねえ、今はあんまりだけど昔はもっと願望あったと思うなあ」

夏海「そうなんだ、何か意外」

佐和子「えー、意外って何よそれ」

夏海「ごめんなさい」

佐和子「あれよ、いわゆる幸せな結婚てやつに憧れてた時期もあった。あったあった、あったわ。その時期あった。でも恋愛ってちょっとめんどくさいところもあるじゃん。歳とつてくると一から関係作るのも億劫になつてきちゃって」

夏海「うん」

佐和子「だから無理しなくてもいいかなあって。ちょうど仕事も楽しくなってきたし」

夏海「佐和子さん、なんかモテそうだもんね」

佐和子「そりゃあねえ、これでも女ですもの。人間ですもの」

夏海「何それ。流行ってるの？」

佐和子「知らないの？大流行だよ、私の中で。あ、今度の小説で使っているよ。主人公の口癖とかにどう？」

夏海「ありがとうございます。考えさせていただきます」

自由に過ごす二人

夏海「一緒に暮らしてるのが佐和子さんでほんと良かった」

佐和子「えー、そう？なんでなんで？」

夏海「面白いしサバサバしてるし。なんか頼りになるお姉さんて感じ」

佐和子「あらら、ありがとうー。妹よ」

夏海「赤の他人なのにさ、なんか不思議」

佐和子「夏海ちゃんて、意外とかわいいところあるよね」

夏海「なにー、意外とって」

佐和子「ごめん、ごめん。それでは改めまして…」

二人「かんぱーい」

自由に過ごす二人。佐和子の携帯が鳴る

夏海「鳴ってますよー」

佐和子「誰だ、こんな時間に連絡してくるのは」

佐和子、画面を見て一瞬固まるがすぐに着信を切る

夏海「…出なくて良かったんですか？」

佐和子「え…ああ、いいのいいの」

夏海「そうですか」

佐和子「自分が酔ってる時に電話かけてくる子なんだ、もう話が長いんだから。あ、私
も着替えてこようかな。ちよつと部屋行ってくるね」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「あー、うまい」

暗転

二場

佐和子がソファに座っている

佐和子「私は前向きな性格だ。だから辛いことなんていくらでも乗り越えられる。多少の困難なんて自分の力でどうにか出来る。私はサバサバしている女だ。だから細かいことなんて気にしない。だから寂しいことはない。だから一人でも生きていける…でも本当は…誰よりも臆病で女々しい私がいることを私は知っている…」

夏海が帰ってくる

夏海「ただいまー」

佐和子「…」

夏海「佐和子さん？」

佐和子「…」

夏海「佐和子さん」

佐和子「え、なに？ビックリした…」

夏海「…ただいま」

佐和子「ああ、おかえり」

夏海「何かあったんですか？」

佐和子「え」

夏海「元気ないですもん」

佐和子「別にそんなことはないよ」

夏海「ありますよ、いつもと全然違う。上の空って感じ。それにこんなに飲まないのって初めてですよ」

佐和子「ああ、最近ちよっと忙しかったからかな」

夏海「先週からですよ」

佐和子「え」

夏海「元気無くなったの。先週、一緒に飲んだ後ぐらいから。私、何か失礼なこと言っちゃいましたか？」

佐和子「言っていない、言っていない。それぐらいから少し身体がだるくってさ。熱はないみたいだから、薬飲んでけば治ると思ってたんだけど」

夏海「そうなの？それなら部屋で休んでたほうがいいよ」

佐和子「あー…うん、そうする。心配してくれてありがとう」

夏海「何か欲しいものあったら言ってね」

佐和子「大丈夫、ありがとう」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「…何があったんだろ」

るきあが帰ってくる

るきあ「ただいまー」

夏海「おかえり」

るきあ「佐和子さんは？」

夏海「部屋にいるよ」

るきあ「そっか」

夏海「体調悪いみたい」

るきあ「そうなんだ、風邪かなあ」

夏海「分かんないけど熱はないみたいだよ。今日は帰るの早いんだね」

るきあ「そうそう、社員のミスでバイトが入りすぎちゃって。明日はイベントがあるからあがらせてもらったの。これから振り付けの確認しなきゃ」

夏海「るきあはいつも忙しそうだね」

るきあ「んー、そうなのかな」

夏海「うん、バイトにレッスンにイベント、それからファンサービス？」

るきあ「まあ、毎日なにかはあるよね」

夏海「でしょ。よく身体もつよ」

るきあ「あんまり考えたことないかも」

夏海「そうなの？」

るきあ「だって私はやりたいことをやってるだけなんだもん。そしたらやることが多い
なっちゃった。それだけだよ。誰だっけなりたいものの為には頑張れるでしょ」

夏海「んー、まあね」

るきあ「だから大変とかしんどいとかってというのは考えたことないかも」

夏海「そうなんだ、なんかすごいね…」

るきあ「そんなことないよ。夏海ちゃんもそれは一緒でしょ？」

夏海「え」

るきあ「なりたいたいの為に仕事も辞めて、今それを追いかけてるんでしょ？」

夏海「うん、まあ…」

るきあ「じゃあ、一緒だよ。夏海ちゃんもすごいじゃん」

夏海「いやいや、私はそんな…」

るきあ 「今度さ、小説書いたら読ませてよー」

夏海 「え、いいけど」

るきあ 「でも私、本とかあんま読まないから簡単なのにしてね」

夏海 「ああ、うん…分かった。じゃあ書けたら」

るきあ 「約束だよ。あ、」

夏海 「なに？」

るきあ 「やばい、ブログ更新してない、写真もまだ撮ってない。とりあえず、部屋行くね」

夏海 「あー、うん」

るきあ、リビングを出て行く

夏海 「…書けないよ…書けるわけない。私、キラキラしてないじゃん。そんなに頑張れてないじゃん」

夏海、ソファに寝転がる。リビングに佐和子がやってくる

佐和子 「あれ、夏海ちゃん、どうしたの？」

夏海 「あ、ちょっと横になってただけ。佐和子さんこそ、どうしたの？」

佐和子 「何か冷たいものでも食べたくなつたから、コンビニ行こうと思って」

夏海 「ダメだよ、具合悪いのに。それぐらい買ってくるから。アイスでいい？」

佐和子 「…ありがとう、じゃあお願いしようかな」

夏海 「うん、行ってきます」

佐和子 「気をつけてね」

夏海、リビングを出て行く

佐和子 「ダメだー…ちゃんとしなきゃ」

るきあがやってくる

るきあ 「あ、佐和子さんだ」

佐和子 「おー、何か久しぶりだね」

るきあ 「そうかも。今週あまり飲んでませんよね？だからかも」

佐和子 「ちょっと忙しくてね」

るきあ 「夏海ちゃんから聞きましたよ、具合どうなんですか？」

佐和子「ああ、大丈夫、大丈夫。全然たいしたことないから」
るきあ「無理しちゃダメですよ」

佐和子「ありがとう。おとなしく部屋に戻っとくわ」

佐和子、リビングを出て行く。そこに夏海が帰ってくる

るきあ「あれ、どこ行ってたの？」

夏海「…コンビニ。アイス買いに。佐和子さんが食べたと言ってたから」

るきあ「何も持っていないじゃん。え、まさか食べちゃったの？」

夏海「そんなわけないでしょ」

るきあ「そうだよねー」

夏海「…外に男の人がいるの…」

るきあ「いると思うよ、男の人くらい」

夏海「そうじゃなくて。反対側の歩道からじっと見てるの、部屋のほうをじっと」

るきあ「えー、なにそれ」

夏海「いや、私だって分かんないよ。外に出てったら慌てた感じで歩き始めたけど…」

気になったから角曲がってこっそり見たの。そしたら戻ってきてまた家のほ

うをじっと見てるの」

るきあ「やだ、気持ち悪い…」

夏海「でしょ。怖かったからすぐ帰ってきた」

るきあ「…」

夏海「どうしようか…」

るきあ「…」

夏海「警察に言ったほうがいいかな…」

るきあ「でもその人、何かしたわけじゃないし…」

夏海「そうだけど…何かあってからじゃ遅いよ。ニュースとかでもあるじゃん。スト

ーカー被害とかさ、最初はこんな感じなのかも…」

るきあ「怖いこと言わないでよ…」

夏海「だって何が起こるかなんて分かんないから」

るきあ「ストーカー…あ、ちょっと待って」

夏海「なに」

るきあ「その男の人…」

夏海「うん…」

るきあ「もしかししたら、私のファンかも知れない」

夏海「え」

るきあ「たまにいるんだよ。ダメって言われてるのに家まで来ちゃうやつとか」

夏海 「え：そうなの」

るきあ 「一応ね、ファンの間でのルールはあるみたいなんだけど」

夏海 「それ本当ならすごいね：芸能人みたいだね」

るきあ 「見覚えある人も知れないからちよつと見てくる」

夏海 「ダメだつて。危ないから、そんなの」

るきあ 「なんで？」

夏海 「もし、るきあのファンでストーカーなんだとしたら、こっちから近づくのは危ないじゃん」

るきあ 「そっか：でもどうしよう…」

夏海 「：私ともう一回行って、写真撮ってくるよ。それで確認してみて」

るきあ 「え、それこそ危なくない？」

夏海 「大丈夫だと思う。さっきの様子だと私には興味ないみたいだし。まあ、まだそこに居ればの話だけど」

るきあ 「うん：でも」

夏海 「危なかったら大声出すから。そしたらすぐ警察に電話して」

るきあ 「：うん、分かった」

夏海 「：行ってくる」

るきあ 「気をつけてね…」

夏海、部屋を出て行く

るきあ 「ほんとに大丈夫かな…」

るきあ、スマホを手に室内をウロウロする。そこに佐和子がやってくる

佐和子 「どうしたの？そんなに歩き回って」

るきあ 「佐和子さん、寝てないとダメですよ」

佐和子 「いや、本当にたいしたことないから。おおげさになっちゃってごめんね。それより夏海ちゃん帰ってきてない？」

るきあ 「えっと…」

佐和子 「さっき私の代わりにコンビニに行ってくれたんだけどね」

るきあ 「ああ：さっき一回帰ってきたけど：なんか買い忘れたものがあるって」

佐和子 「あ、そうなんだ」

るきあ 「帰ったら部屋に持っていきます。アイスですよね」

佐和子 「あ、そうそう。アイス、アイス。ごめんね、じゃあお願い」
るきあ 「はい」

佐和子、部屋に戻る

るきあ 「…帰って来ないよー…大丈夫かな…警察に電話したほうが…様子見に行ったらほうがいいかな…」

るきあ、迷った末に外に行こうとするが、そこに夏海が駆け込んでくる

るきあ 「びっくりした。大丈夫だった？」

夏海 「大丈夫。あー、ドキドキした。怖かったあ」

るきあ 「写真撮れた？」

夏海 「うん、多分ね…ほとんど手元見れなかったけど」

るきあ 「夏海ちゃん、すごいね。ほんと無事で良かった」

夏海 「でももう行けない。さすがにもう一回は無理。とりあえず写真見て」

夏海、スマホで写真を見せる

夏海 「どう？見覚えある？」

るきあ 「あー…見たことあるような…えー…」

夏海 「どう？」

るきあ 「…ごめん。よく分かんない…多分、私のファンの中にはいないと思う。こういう普通の感じの人がいたら逆に浮いちゃうと思うから」

夏海 「そっか…」

るきあ 「ごめんね、危ないことしてくれたのに」

夏海 「それは気にしなくていいけど。どうしようか…」

るきあ 「うーん…」

佐和子がリビングにやって来る

佐和子 「…どうしたの？二人で考え込んでるじゃって。あ、夏海ちゃん、おかえり」

夏海 「佐和子さん。あ、ごめん、アイスまだ買ってない…」

佐和子 「うん。全然良いけど。どうしたの？」

るきあ 「実は外に変な男の人がいて…」

佐和子 「変な男？」

るきあ 「うん、何か家のほうをずっと見てるって…」

佐和子 「え」

夏海 「さっきコンビニ行こうと思って外に出たら道路の反対側にいたの」

るきあ 「なんかね、通りすぎてったのに戻ってきてまたこっちを見てるんだって」

佐和子 「なにそれ」

夏海 「分かんない。でも写真撮ってきたよ」

佐和子 「え、写真あるの？どんな人か見せて」

夏海 「うん」

夏海、写真を見せる

佐和子 「…」

夏海 「どう？」

るきあ 「見たことありますか？」

佐和子 「…うん…見覚えはないかな、こんな人」

夏海 「…」

るきあ 「そっか…」

夏海 「やっぱり警察の人に来てもらおうか」

佐和子 「警察に？」

夏海 「うん」

るきあ 「やっぱそうしたほうがいいのかなあ…」

夏海、電話をかけようとする

佐和子 「あ、ちょっと待って。多分、多分だけどね今の状態じゃ警察はなんにもしてくれないと思う」

夏海 「なんで？」

佐和子 「だってその人が何かした証拠がはっきりあるわけじゃないし。たまたま見てただけだって言われるかも」

るきあ 「そうですよねえ…」

夏海 「でも…」

佐和子 「それどころか騒ぎにしたことで恨まれる可能性もあるよ。そっちのほうが危ないかもしれない」

るきあ 「ほんとだ。そうならもつと怖い」

夏海 「でも今でも十分怪しいじゃん。私たち充分怖がってる。被害受けてるのに」

佐和子 「とりあえず、今は落ち着いて。相手が何もしてこないなら様子を見ましょう。」

あ、家の戸締りの確認しておこうか」

るきあ 「あー、部屋の窓の鍵してないかも」

るきあ、慌てて部屋に戻る

佐和子「夏海ちゃんも」

夏海「…分かった」

佐和子「大丈夫。何とかなるよ、意外とね」

夏海「うん」

佐和子「私は他の部屋も見てくるから」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「…」

暗転

電話が鳴る

佐和子「もしもし。もういい加減にして。これ以上こんなことするなら本当に警察に通報するから。私もあの日はどうかしてたの。はあ？調子いいこと言わないでよ、どこまで自分勝手なの…家にまで来られたって迷惑なだけなの。お願いだからほっといて。金輪際、私に関わらないで。もう二度と連絡したりしないから。どうぞ、死ぬまでお幸せに」

佐和子、電話を切る

佐和子「もう…何やってんのよ、ほんと…」

夏海「…佐和子さん」

佐和子「夏海ちゃん…」

夏海「…大丈夫ですか？」

佐和子「夏海ちゃん、聞こえてたよね…」

夏海「はい…」

佐和子「…そうだよね」

夏海「外の男の人、佐和子さんの知り合いだったんですね」

佐和子「…」

夏海「あ、それならいいんです。変な人じゃないなら安心だし」

佐和子「怖がらせちゃってごめんね…」

夏海「ううん、私は大丈夫」

佐和子「そう…なら良かった。あ、るきあちゃんにも言っとかなきゃ」

佐和子、リビングを出て行こうとする

夏海「あ、るきあも大丈夫そうだった。部屋から音楽が聞こえてたから明日の練習してるんだと思う」

佐和子「そう…いいなあ。やつぱり若い」

夏海「…」

佐和子「怖いものなんて何にもないんだろなあ」

夏海「佐和子さん、大丈夫？」

佐和子「え」

夏海「最近、ずっと元気なかったの、あの男の人のせいじゃないの？」

佐和子「…」

夏海「ごめん、私が何か出来るってわけじゃないけど…そもそも佐和子さんのことを全部知ってるわけじゃないし。でも家族みたいに思ってる人がしんどそうだったら、お姉ちゃんが辛そうだったら…気になるよ」

佐和子「…」

夏海「ごめん…余計なこと…」

佐和子「ううん、ありがとう。あのストーカー、もういなくなるから。もう心配いらないからね」

夏海「そう」

佐和子「あれね、ただの元カレ」

夏海「え」

佐和子「私が前に付き合ってた人。私がこの家に来るちょっと前に別れたんだ」

夏海「…」

佐和子「二十九の時から…えっと、四年いや五年かな。ほとんど一緒に暮らしてたようなもんだったけどね。あー、このまま結婚するんだろなああって思ってた。別にはつきり言われたわけじゃないけど、年齢的にもこのあたりかなって」

夏海「うん…」

佐和子「でもそしたらさ…私がいないうちに別の女を家に呼んでたんだよ」

夏海「うそ…最低…」

佐和子「最低でしょ？ほんと最低な男なの。でも我慢しようかなとも思ったんだ…ほら、よく言うじゃん。男は浮気する生き物とか、フラフラしても最後には好きな女の所に帰ってくるとか。女がドーンと構えてたら上手くいくとかさ…バカみ

「たいだよね、ほんと。だって今時、そんな演歌みたいな女いないよね」

夏海「…うん」

佐和子「もし頭で理解できたとしてもさ、待ってる私の気持ちになるわけじゃないのに。寂しいとか悔しいとか、そんな気持ちをどこに持っていけばいいのかわかんなくてすぐに別れたんだけどね」

夏海「そうだったんだ…」

佐和子「そんな時にこの家を見つけたの。さすがにこの歳から一人で暮らし始めるのって結構しんどくてさ。誰かとも居たかったし」

夏海「うん…でもなんで今更その人ここに来たの？住所だって…」

佐和子「それは…」

夏海「まさか…本当に佐和子さんのストーリーカーになっちゃったの？だとしたらやっぱり警察に言ったほうがいいよね。住んでるとこばれてるなら絶対また来るよ」

佐和子「違うの」

夏海「え」

佐和子「私が教えたの」

夏海「なんで？」

佐和子「…この前、一緒に飲んでた時に電話かかってきたの覚えてる？」

夏海「ああ…友達からかかってきたやつ？」

佐和子「それ本当は、外にいる男からだったの」

夏海「そうだったんだ…」

佐和子「なんかね、ヨリを戻したいんだって。ちゃんと考えたらやっぱり私しかいないんだって。結婚してずっと一緒にいようって…」

夏海「そんなの勝手だよ…」

佐和子「そう、勝手なの。ただの自分勝手。私がどんな気持ちでいたかなんて何も考えてない…でもね…私それを聞いたとき、ちよつとだけ嬉しかったんだ」

夏海「…」

佐和子「何でだろ…酔ってたのかもね。返事はしなかったけど、ここの住所だけ伝えて電話切っちゃってた」

夏海「…」

佐和子「こうなることを…自分から会いに来てくれることを望んでたんだ…」

夏海「…」

佐和子「くだらないよね…夏海ちゃん、前に私のことサバサバしてて頼れるって言うてくれたよね」

夏海「うん…」

佐和子「ほんととは全然そんなことないの。ずっと年上なのにかっこ悪くてごめんね」

夏海「そんなことないよ」

佐和子の電話が鳴る

佐和子「…なに？そう…うん、分かった」

電話を切る

夏海「…外にいる人？」

佐和子「うん、ちよつと会ってくるね」

夏海「大丈夫なの？」

佐和子「うん」

佐和子、部屋を出て行く

夏海「気をつけて」

夏海、ソファに横になる

夏海「勝手だよ…自分から出て行たくせに家族づらししないで…私たちの気持ちなんて何も考えてないじゃん。嫌だ…気持ちわるい…帰りたくないよ」

佐和子、部屋に戻ってくる

佐和子「ただいま」

夏海「佐和子さん。大丈夫だった？」

佐和子「うん」

夏海「良かった」

佐和子「殴ってやった」

夏海「え」

佐和子「あんまりゴチャゴチャ言うから、いい加減にしろって」

夏海「すごい」

佐和子「はー、スッキリした」

夏海「佐和子さん、やっぱりかっこいいよ」

佐和子「ありがとう。あ、そうだ」

佐和子、リビングを出て行く。ビールを持って戻ってくる

佐和子「良かったら飲まない？」

夏海「え、でも身体…」

佐和子「余計なこと考えて疲れてただけみたい」

夏海「そっか、いいよ。飲もう飲もう」

佐和子「ありがとう、それでは…」

二人「かんばーい」

二人、ビールを飲む

佐和子「ああ、これこれ。なんで我慢できたんだろ。不思議」

二人、黙々と飲んでいる

佐和子「なんで好きだったんだろ。あんなくだらない男。何が良かったんだろ。五年もかけてなんにも残らなかったなあ…何やってるんだろ。ほんとバカみたい」

夏海「…そんなことないよ」

佐和子「…」

夏海「だって佐和子さん、その人のこと好きだったんだもん。誰だってさ、好きな人に選ばれたら嬉しいよ。特別になれたら嬉しいもん。だからバカみたいじゃない」

佐和子「そうだといいな…」

夏海「だって女ですもの。人間ですもの」

佐和子「それ、私のやつ」

夏海「いいじゃん。ちよっとお借りします」

佐和子「仕方ないなあ、どんどん使ってちょうだい」

佐和子、持ってきたビールを飲み干す

佐和子「あ、もう無くなった」

夏海「はやすぎ。じゃあ佐和子さんの名言借りたお礼に、新しいやつ持ってきます」

佐和子「はい、よろしくお願いします」

夏海、リビングを出て行く

佐和子「あーあ、バカみたい。でも…好きだったんだなあ…」

暗転

三場

夏海 「夢があるのは素晴らしいこと。その人は自分への理由を持っている。それをいつ手放すのかと聞かれたら答えられる人は少ないと思う。夢をみた時間だけ目が覚めたときの現実を受け入れる時間が必要だから。ずっと夢を見続けていられる人、ひたすら現実を見つめていられる人、きつとどちらも幸せなんだろう。だってその二つの世界をフラフラしている私は、終わらない悪夢を見ているのと何ら変わりないのだから…」

るきあが登場する

るきあ 「えー、これって一体どういうこと?」

夏海 「えっと…だから生きていくことは簡単じゃないっていう…」

るきあ 「そうなの?」

夏海 「うん。夢があると叶わなかったときにガクってくるじゃん。それにかけた時間、お金、自分自身。夢がある人はそういう怖さを抱えながら頑張って生きているっていうか」

るきあ 「ふーん…私もそうなのかなあ」

夏海 「あ、ごめん。るきあがそうだってわけじゃなくて。あくまでこれは私の本の中の登場人物だから」

るきあ 「私はそんな風に考えたことなかったなあ」

夏海 「それは多分、るきあが本気だからだよ」

るきあ 「うん、私ね、もっと有名になりたい。絶対なれるって思ってるの。それ以外の人生なんて全然想像つかない」

夏海 「そっか…なれるといいね」

るきあ 「ありがとう」

佐和子が眠そうにリビングにやってくる

佐和子 「おはよう。どうしたの?二人とも」

夏海 「佐和子さん、もうお昼近いよ…」

佐和子 「あれ、そう?昨日飲みすぎちゃってさー。いいでしょ、休みの日くらい」

夏海 「そうだねー」

るきあ 「佐和子さんも読んでみる?」

佐和子 「え、なにになに?」

るきあ 「夏海ちゃんの書いた小説だよ」

佐和子「あ、読みたい読みたい」

夏海「まだ全然書けてないから。ほんとに最初の最初だから」

佐和子、小説を読む

夏海「…」

佐和子「夏海ちゃん…」

夏海「…どう？」

佐和子「これ…」

夏海「始まりからちよつと暗すぎるかな…」

佐和子「この話、すごくいいと思う」

夏海「ほんとに？」

佐和子「うん、続き読みたいもん」

夏海「ほんとに？…良かった」

佐和子「すごいわあ。なんか深い感じがする。というか深い。若いのにすごいよね」

るきあ「そつかあ、佐和子さんは解るんだあ」

佐和子「んー、全部は解らないけど。このお話の空気？みたいなのは」

るきあ「私ももつと本読もうかな、でも字ばかりだとすぐ眠くなるんだよね」

佐和子「あー、私も若いときはそうだったわ」

るきあ「え、佐和子さんも？なんか安心するな」

佐和子「大丈夫、大丈夫。これから読めばいいんだよ。夏海ちゃん、この話いつ完成するの？」

夏海「今月中には書き上げるつもり。今度の新人賞に応募したいから」

佐和子「それ選ばれたら作家としてデビューできるってわけね」

夏海「うん…まあね」

るきあ「すごいなあ。夏海ちゃん、なんだか遠くに行っちゃみたい」

夏海「いやいや、別選ばれたわけじゃないから。そもそもちゃんと最後まで書けるか分かんないし」

佐和子「いいなあ。二人とも輝いてるわ。あー、あの頃が懐かしい」

るきあ「私ももつと頑張らなきゃ」

佐和子「しっかり頑張れ、若者よ。あ、もうこんな時間、友達と約束してるんだった。準備しないと。じゃあね」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「私もこれから仕事だから」

るきあ「行つてらっしゃーい」

夏海、リビングを出て行く

るきあ「掃除でもしよつかな。衣裳の整理しなきゃ」

るきあ、リビングを出て行こうとする。電話が鳴る

るきあ「あ、もしもし、お疲れ様です。どうしたんですか？え、ほんとに？もちろんです。

えー、ほんとに。はい、絶対頑張ります。はい、はい。分かりました。え…いつぐらいですか？そう…ですか…いや、大丈夫です。分かりました。はい、失礼します（電話を切る）私ももっと頑張らなきゃ…」

るきあ、リビングを出て行く

暗転

夏海がソファに座っている。目の前にはパソコンが置いてある

夏海「私が見ている夢はとても不安定。それは未来に向かうものではないから。私が見ている夢はとても虚しい。それは何かから逃れるためだから。それでも私にはこの夢が必要だ。それは私がこの街で生きていくかすかな理由になり得るから…」

夏海、ため息をついて頭を抱える。佐和子がリビングにやつてくる

佐和子「はいはい。今日も一日、お疲れちゃん。ん？夏海ちゃん、大丈夫？」

夏海「佐和子さん。おかえり」

佐和子「あ、考えてたのか。邪魔しちゃってごめんね」

夏海「ううん、すぐ片付けるから」

佐和子「いいよ、いいよ。私、部屋に行ってるから。気にしないで」

夏海「ここで飲んでいいよ」

佐和子「あ、いや、でも邪魔じゃない？」

夏海「全然。進まないから休憩しようと思つてたところなんだ」

佐和子「そういうことなら。夏海ちゃんも飲む？」

夏海「うん」

佐和子、リビングを出て行く。夏海、パソコンの画面を見つめる

夏海「…書けるわけないじゃん…私に」

佐和子、ビールを持って戻ってくる

佐和子「はい」

夏海「ありがとう」

佐和子「それでは…」

二人「かんぱーい」

佐和子「あー、これだわ。やっぱこれ」

夏海「ほんとおいしそうに飲むね」

佐和子「まあね、これがないと生きていけないぐらいだもん」

夏海「そういう風に思える瞬間があるっていいよね」

佐和子「それぐらい誰でもあるでしょ。特別なことじゃないよ」

夏海「まあ…そうかな」

佐和子「あんまり進んでないの？それ」

夏海「うん、まあね…」

佐和子「スランプってやつか。作家って大変そうだね」

夏海「スランプって言えるほどじゃないよ。ただストーリーが進んでないだけだもん」

佐和子「そう？文章書けるだけでもすごいと思うよ。私は無理。企画書とかも苦手なのよ。

ばあーっと喋っちゃったほうが楽なんだよね」

夏海「佐和子さんらしい」

佐和子「夏海ちゃんはなんで小説書こうと思ったの？」

夏海「え」

佐和子「いや、私は苦手だからさ。読むのは好きなんだけどね。ほら、夏休みの宿題とかで読書感想文とかあったでしょ」

夏海「ああ、あったね」

佐和子「あれとかもう書くことがなんも無いの。何書けばいいか分かんないの。ただ本の内容は面白かったからひたすら、面白かったです、の繰り返し」

夏海「そうなんだ」

佐和子「どのあたりがどう面白いのかを具体的に、ってよく注意されてたな。こっちはさ、面白かったことをそのまま伝えてるだけなのに」

夏海「私もそんな感じだったなあ」

佐和子「え、そうなの」

夏海「うん、全然得意じゃなかったよ、むしろ苦手なほう」

佐和子「じゃあ尚更、不思議だわ。そういう道を選ぶ人って相当好きじゃないと出来ない

と思うのよ。だから何かきっかけとかがあったんだらうなって」

夏海「あったような気がするけどね…」

佐和子、ビールを飲み干す

夏海「あ、私が取ってくるよ」

佐和子「いつもありがとー」

夏海、リビングを出て行く。るきあが帰ってくる

るきあ「ただいま」

佐和子「あ、おかえり」

るきあ「夏海ちゃんは？」

佐和子「ビール、取りに行ってくれてる」

るきあ「そっか」

佐和子「どうかした？」

るきあ「うん、ちょっと話したいことが…」

夏海がビールを持って戻ってくる

夏海「あ、おかえり。はい」

佐和子「ありがとー」

るきあ「ただいま」

夏海「るきあも飲む？」

るきあ「ううん、私はいいや」

夏海「そう」

佐和子「それで？話したいことって？」

夏海「え、なに？なんかあったの？」

るきあ「うん、もしかしたら…私ね、デビューできるかも知れないの」

佐和子「え、デビューって？」

夏海「え、テレビとかに出るってこと？」

佐和子「芸能人になるってこと？」

るきあ「うん、すぐにじゃないけど」

二人「おめでとう」

佐和子「えー、すごい。ついにチャンスが来たんだね、ほんとおめでとう」

るきあ「ありがとう」

佐和子「どうしよう、芸能人と一緒に暮らすなんて。マスコミとか気にしたほうがいいよね。あー、サンングラスとかあったかな」

夏海「佐和子さんが狙われるわけじゃないんだから」

佐和子「それもそうだね」

夏海「いつぐらいにデビューするの？」

るきあ「まだはつきりと決まったわけじゃないんだ。半年以内には結果が出ると思うんだけど」

夏海「これから大変そうだね」

佐和子「うん、なんか出来ることがあったら手伝うよ。応援するよ」

るきあ「ありがとう。でも大丈夫：それでね私、この家出ることになったの」

二人「え」

夏海「どういうこと？」

るきあ「デビューの候補がね、百人ぐらいいるの」

佐和子「そんなに」

るきあ「うん。実はね、アイドルを目指す女の子たちがグループごとに共同生活をしながらデビューを目指すっていう企画なの。それが毎日ネットで配信されて、たくさん投票された子がデビュー出来るんだ」

夏海「：それ何人ぐらい選ばれるの？」

るきあ「選ばれるのは五人だけ」

佐和子「少ないんだね：」

るきあ「うん」

夏海「家出るっていつ？」

るきあ「再来週」

佐和子「再来週？」

夏海「そんなすぐに？」

るきあ「うん、出来るだけ早くスタートさせたいんだって。他の女の子ももう準備してるって」

夏海「ちよつと待ってよ。いくらなんでも急すぎるよ。ここの家賃とかもあるし。出て行くときは半年前には伝えるって約束じゃん」

るきあ「ごめんね。私もいきなり言われてびっくりしたの。家賃はその分ちゃんと出すから」

佐和子「まあ、それは事情もあるんだろうけど、その：もし選ばれなかった場合はどうなるの？ここに帰ってこれるの？」

るきあ「ううん、もし選ばれなくてもここには帰ってこない。研修生っていう扱いになってそのまま共同生活することになる」

佐和子「そうなの？」

夏海「え、じゃあ再来週に出て行ってそれっきりになるってこと？」

るきあ「そういうことになる」

夏海「急すぎるよ。確かにチャンスなのかも知れないけど…でもその企画自体ちよつとあやしくない？」

佐和子「夏海ちゃん」

夏海「せっかく三人で暮らしてきたのに、そんないきなりそれを捨てるなんて」

るきあ「ごめんね。でも捨てるつもりなんてないよ。私、佐和子さんや夏海ちゃんと一緒にほんとに楽しかった。一人っ子だったから、お姉ちゃんが出来たみたいで嬉しかった。ここでの思い出は私の一生の宝物だよ」

夏海「だったらこのままでもいいじゃん。これで終わりなわけじゃないし、今度はもっといい話が来るかも知れないし」

るきあ「うん…二人と離れるのはさみしいよ。でも、私が本当に欲しいのは家族じゃないの。私は絶対にアイドルになりたいの。絶対叶えたい夢なの」

夏海「…いきなり置いていかれる身にもなつてよ。夢だつて言えばなんでも許されるの？いきなりさ、色々変わっちゃうんだよ？今まで当たり前になっていた人が居なくなるんだよ？こつちの気持ちも考えてよ」

佐和子「夏海ちゃん」

夏海「居なくなる側はいつも勝手なんだよ…」

るきあ「夏海ちゃんに本気だつて言われて私、すごく嬉しかったんだ。人からそう見てもらえるなら、もっともっと頑張れる気がするの。私、頑張つて絶対アイドルになるから。だから夏海ちゃんも絶対、小説家になつてね。夏海ちゃんの本、たくさん読むから」

夏海「分かった…もういいよ。勝手にすれば」

夏海、リビングを出て行く

佐和子「夏海ちゃん」

るきあ「佐和子さん、ごめんね」

佐和子「気にしないで。いきなりで驚いちゃったけど応援してるからね、夏海ちゃんもきつとそうだから」

るきあ「うん」

佐和子「これから大変だと思うけど頑張つてね。テレビで見る日を楽しみにしてる」

るきあ「ありがとう。私も部屋に戻るね、荷物の整理しないといけないから」

佐和子「そっか、時間ないもんね。あ、引越す前にパーティーでもしよっか。このまま離れるのも嫌だし」

るきあ「うん、ありがとう。それじゃ」
佐和子「うん」

るきあ、リビングを出て行く

暗転

四場

夏海がパソコンの前に座っている

夏海「逃げてても逃げててもいつかは目の前の現実を受け入れなければいけない。そのことに心の奥では気付いているのだ。私はいつまで、どこまで逃げて行くのだろう。前に進める瞬間は本当はもうそこまで来ているかもしれないのに…」

佐和子がリビングにやってくる

佐和子「夏海ちゃん」

夏海「…佐和子さん」

佐和子「遅くまで頑張るね。寝なくていいの？」

夏海「明日は休みだから」

佐和子「そう」

夏海「佐和子さん」

佐和子「ん」

夏海「さつきはごめん…」

佐和子「ああ…気にしてないよ。大丈夫」

夏海「るきあにも謝らないと。ひどいこと言っちゃったし」

佐和子「夏海ちゃんがあんな感情的になるなんて珍しいね」

夏海「…」

佐和子「しばらくは二人暮らしか。そのうち新しい人が入ってくるんだね。そう考えると

不思議だね、シェアハウスって」

夏海「…うん」

佐和子「アパートとかより距離が近いけど家族でも友達でもない人。次に来る人も気の合
う人だといいなあ。飲んででも許してくれる人がいい」

夏海「そうだね」

佐和子「二人の優しさにだいぶ甘やかされてたからなあ」

夏海「…」

佐和子「初めはさ、やっぱりぎこちなかったって言うか、そりゃ遠慮するよね他人同士だ
もん。特に私は歳も離れてたからさ」

夏海「今じゃ全然気にならないもんね」

佐和子「そうそう。いつからだろうねえ、気楽に話せるようになったのは」

夏海「覚えてないなあ」

佐和子「私も覚えてない。でも人との付き合い方ってそんな感じだよ」

夏海「そうかもね」

佐和子「さよならするのって寂しいよね」

夏海「…うん」

佐和子「でも、るきあちゃんだけじゃないな。夏海ちゃんだって若いし夢もあるし、まだ
まだこれから。そのうち出て行くかもしれないし」

夏海「それはないよ」

佐和子「なんで？それは分かんないでしょ。今、書いてる本が賞をとったりしたらさ」

夏海「それもなしよ」

佐和子「やってみなきゃ分かんないよ」

夏海「書けないから」

佐和子「え」

夏海「私には書けないの」

佐和子「書いてるじゃん。この前読ませてもらった話、面白かったよ。私は結構好きだな
あ」

夏海「あんなのそれっぽくすれば誰でも書ける。私ね、るきあみたいに本気じゃないの。

私のはただの言い訳。全然キラキラしてないんだ」

佐和子「言い訳って？」

夏海「逃げてるだけってこと」

佐和子「どういうこと？」

夏海「親から実家に帰って来いってずっと言われてるんだよね。なんか父親の体調があ
んまり良くないみたいでさ。お母さん一人じゃ大変だからって」

佐和子「そうだったの。それ大変だね。一度、様子見に帰ってあげたら？」

夏海「嫌なの」

佐和子「…」

夏海「帰りたくないの。あんな家、二度と帰りたくない」

佐和子「ケンカでもしてるの？」

夏海「…」

佐和子「色々、理由はあると思うけど仲直りは早めにしといたほうがいいと思うよ」

夏海「そういうんじゃないの」

佐和子「そっか…」

夏海「あの人たちのことを家族と思ってないだけ」

佐和子「そんなにこじれてるの？」

夏海「…昔は普通だったんだ。二人のことが好きだった。ごく普通のどこにでもある家。でもすごく楽しかった」

佐和子「…」

夏海「それなのに、ある日お父さんが浮気相手と一緒に家を出て行ったの」

佐和子「え…」

夏海「びっくりするよね？誰だっぴっくりするよ。だって私の家は幸せそうだったもん。幸せだったもん」

佐和子「…」

夏海「お母さん、泣いてたよ。私も一緒に泣いた。でも生きていくしかないからって。

これから親子二人で生きていこうねって約束したの」

佐和子「…大変だったのね」

夏海「中学生の頃だったけどまだはつきり覚えてる」

佐和子「それからずっと二人で…あれ、でもお父さんの体調が悪いつて」

夏海「うん」

佐和子「あ、お母さんが…そうだよ、いきなり新しいお父さんって言われてもねえ」

夏海「戻ってきたの」

佐和子「え」

夏海「出て行ってから三年ぐらいかな。学校から帰ったら家に居たの。お父さんだった人が」

佐和子「…」

夏海「浮気相手に愛想尽かされて捨てられたらしいよ。それで考え直した結果、お母さん一筋になったんだって」

佐和子「どつかで聞いた話だけレベルが違う…」

夏海「本当に最低な男だよ。お母さんも、佐和子さんみたいにあいつのこと殴ってやれば良かったのに。それぐらいする権利あるよね」

佐和子「あるよ。何発でもありだよ」

夏海「それなのに妙に嬉しがっちゃったりしてさ。今回だけは、とか言って戻ってくるあいつを受け入れたの」

佐和子「ああー、百パーセント否定できないのが辛いわ」

夏海「お母さん、嬉しそうだった。私と二人のときより笑ってた。あんなにひどいことされたのに」

佐和子「…うん」

夏海「確かに夫婦の仲は戻ったのかもしれないけど、あの日の私は取り残されたまま…お父さんだった人とそいつを好きな女の人。もう一緒に居るのが気持ち悪くてさ。就職をきっかけにこっちに出てきたんだ」

佐和子「そう…」

夏海「仕事辞めて小説書いているのも家に帰らない為なんだ。やりたいことがある、私には夢があるって思ってたれば周りも自分も納得させられるから。努力だけじゃどうにもならない世界だから無理にでも夢を見続けていられる…そんなことしててもなんにも変わらないのにな…」

佐和子「…」

夏海「るきあは輝いてるよね。だって本当に好きなことをしてるんだもん。人から見たらしんどいこともそう思わないくらい本気。見てるとうらやましくなってくる。私って何やってるんだろうなって」

佐和子「夏海ちゃん」

夏海「あんなこと言うつもりじゃなかったのにな…」

佐和子「…これからでもいいじゃない」

夏海「え」

佐和子「これからさ、本気の夢にすればいいじゃん。私、夏海ちゃんの文章好きだよ。面白かった。それっぽくであれだけ出来るならもっと書けるよ」

夏海「…」

佐和子「その…家族のことは私には何も言えないけどさ。すぐにどうにかしようと思わなくてもいいと思うの。だって夏海ちゃんは傷ついたんだもん。時間はたくさん必要だよ。でもね…夏海ちゃんはまだ若いんだよ？これから何にだって挑戦できるよ」

夏海「…」

佐和子「私、夏海ちゃんの小説をちゃんと読んでみたいの。ね、お願い。もうファンになっちゃったからさ。あの本、最後まで書いてみて。お願いお願い」

夏海「…ファンなのに強引…」

佐和子、夏海を抱きしめる

夏海「…ありがとう」

佐和子「妹が元氣無かったら気になるよ。当然でしょ？」

夏海「うん…」

佐和子「ほんと不思議。私、実家に妹いるんだけどね、こういう風にしたことないよ。なんか家族よりも家族らしいよね」

夏海「うん」

佐和子「でもそれがいいのかもしれないね。うん…それだからいいんだわ」

夏海「佐和子さん…私、るきあに謝ってくるね」

夏海、リビングを出て行くとする

佐和子「ちょっと待って」

夏海「どうしたの？」

佐和子「パーティーしよう」

夏海「今から？」

佐和子「もうこの際、パーティーしちゃおう。仲直りとするきあちゃんの成功を願って」

夏海「え」

佐和子「とりあえず、るきあちゃん呼んでくる。夏海ちゃんはお酒用意しといて」

佐和子と夏海、リビングを出て行く。先に夏海がビールを持って戻ってくる

夏海「ほんと強引なんだから」

佐和子、るきあを連れて戻ってくる

るきあ「まだ全然片付いてないのに」

佐和子「いいからいいから、後で私も手伝うからさ。荷物の片付け、めっちゃめっちゃ得意だから。とりあえず今日は飲もうよ。お祝いだよ」

るきあ「なんの？」

佐和子「るきあちゃんのアイドルとしての一步を祝して。あ、夏海ちゃん、ビール、ビール」

夏海「うん…はい」

るきあ「…ありがとう」

佐和子「それでは、私たちの未来に…」

夏海「変わってるじゃん」

佐和子「いいから」

三人「かんばしい」

佐和子「ああー、やっぱりこの瞬間が最高」

夏海「うん」

るきあ「苦いけどなんだか今日はおいしく感じる」

佐和子「お、ちよっと大人になったね」

るきあ「そうかも」

佐和子「これからそういうこといっぱいあるよ、頑張ってるね」

るきあ「ありがとう」

佐和子、ビールを飲み干す

佐和子「あらら、まただ」

夏海「だから早いわ。新しいの取ってくるよ」

佐和子「あ、今日はいいのいいの。行ってきまーす」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「さつきはごめんね」

るきあ「ううん、私こそいきなりでごめん」

夏海「るきあなら絶対なれるよ。応援してるから、投票もするから」

るきあ「ありがとう」

夏海「頑張ってる」

るきあ「夏海ちゃんも」

夏海「うん、ありがとう」

佐和子がやってくる

佐和子「大変、大変」

夏海「どうしたの？」

佐和子「ないのよ」

るきあ「何がですか？」

佐和子「お酒がないの。この前買ったと思ってたのに」

夏海「なんだ…」

佐和子「なんだじゃないよ。せっかくのパーティーなんだよ。おつまみとかもないし」

夏海「だっていきなりだったから準備とかしてないし…」

佐和子「仕方ない。ちよっとコンビニ行ってくる。あ、それかみんなで行く？」

るきあ「あ、行きたいですー」

夏海「うん、行こう行こう」

佐和子「よし、それじゃあ出発」

三人、笑いながら部屋を出て行く

佐和子「あ、ちよっと待って。財布忘れたー」

暗転

夏海と佐和子がパソコンを見ている

夏海「るきあ、いた？」

佐和子「えっと…あ、この女の子の後ろ」

夏海「え、ああ、いたいた」

佐和子「ほんとこれだけライバル多いと大変ね」

夏海「変わってなさそうだね」

佐和子「うん、元気そうだった。でもまだ始まったばかりだもんね、先は長いなあ」

夏海「がんばれ」

佐和子「そういえば夏海ちゃん、この前応募した小説どうなったの？」

夏海「ああ、あれは見事に落選しました」

佐和子「そっか…」

夏海「うん、でもいいんだ。また挑戦してみるから。どこまで出来るか分かんないけど」

佐和子「読むの楽しみにしてるわ」

夏海「佐和子さんの反応は重要だからね、緊張するなあ」

佐和子「どんな話にするか決めてるの？」

夏海「うん。シェアハウスを舞台にしようかなって」

佐和子「おおー、いいね」

夏海「ここでのエピソードもいかせると思う」

佐和子「私の話を使うときはちゃんと行ってよ。高いかもよー」

夏海「もちろん。その時はよろしくね」

佐和子「いくらでもどーぞ」

笑いあう二人

夏海「あ、もうすぐ来るかな？」

佐和子「ああ、今日からだもんね」

夏海「るきあと同じ年だったよね」

佐和子「そうだった。また若い子が入るのね。仲良くなれるかなあ」

夏海「佐和子さんなら大丈夫だよ」

佐和子「ジェネレーションギャップとかあるんだから。それに人見知りだし」

夏海「だれが？」

佐和子「わたし」

夏海「うそー」

佐和子「本当」

部屋のチャイムが鳴る

佐和子「あ、来たかな。はい」

佐和子、リビングを出て行く

夏海「がんばれ」

佐和子、ナナを連れて戻ってくる

佐和子「こっちがリビングね」

ナナ「了解っす」

夏海「あ、はじめまして、佐藤夏海です」

ナナ「はじめまして、ナナです」

佐和子「水谷佐和子です。これからよろしくね」

ナナ「よろしく願いしまーす」

佐和子「名字は？」

ナナ「あー。自分、今バンドやっててえ、基本バンドの中の名前で通してるんすよ」

夏海「そ、そうなんだ」

ナナ「だから、ナナって呼んでもらって大丈夫っす」

佐和子「分かった。ナナちゃんはプロとか目指してるの？」

ナナ「もちろんっす。とりあえず世界目指してるんで」

夏海「すごいね」

ナナ「あざーっす」

佐和子「じゃあ、ナナちゃんの部屋に案内するね。あと、家のルールとかもあるから説明するよ」

ナナ「はい」

佐和子「ちなみにナナちゃんはお酒とか飲む？」

ナナ「酒ですか。大好きっす」

佐和子「やった。後で歓迎パーティーしようと思ってたんだ。一緒に飲もう」

ナナ「はい、よろこんでー」

夏海「だから大丈夫だって言ったじゃん」

佐和子、ナナを連れてリビングを出て行く。夏海、パソコンの前に座る

夏海「私は今日もここで生きている。自分の選んだ道がどこに向かっているか誰にも分からない。歩けない日がある、笑っていられない日がある。だけど私は独りじゃない。きっと今はそれだけで充分なんだ」

夏海、少し考えて文字を消していく

佐和子「夏海ちゃん、ちよつと来てくれるー？」

夏海「どうしたの？」

佐和子「この部屋のエアコンってさー」

夏海「あー、それね。すぐ行くー」

夏海、パソコンの画面を閉じてリビングを出て行く

幕